

荘司 一步

1. 事業実施の目的

調査対象地域の選定と調査地に関する予備的な情報収集、および発掘調査技術の習得

2. 実施場所

ペルー共和国、アンカシュ州、ラ・リベルタ州、ランバイエケ州、カハマルカ州

3. 実施期日

平成 27 年 7 月 14 日（火）から 10 月 31 日（土）

4. 成果報告

●事業の概要

【調査の目的と対象】

本調査の目的は、文献の渉猟によって選定した候補の中から、発掘調査に向けた調査対象遺跡を決定し、調査地に関する予備的な情報収集を行うこと、および海岸地帯に位置する遺跡の発掘調査技術を習得することである。

前者の目的に該当する調査の対象地域は、ペルー共和国の北海岸および北部中央海岸における沿岸地域である。これらの地域を実際に訪れて、遺跡の有無や残存状況、立地、治安やインフラの整備状況などの情報を収集し、今後の研究で扱う調査対象地域を選定する。調査は河川を単位とした沿岸地域で行われ、その対象となる河川は北から順に、レケ川、サーニャ川、ヘケテペケ川、チカマ川、チャオ川、カスマ川、クレブラス川の 7 つである

【図 1】。それぞれ、河川の周辺の中心的な町において宿泊し、現地の交通手段を用いて遺跡を訪れた。研究の対象となる時代は形成期（紀元前 3000~50 年）である。

さらに報告者は、後者の目的を達成するために、カハマルカ州テンブラデーラでおこなわれた発掘調査に参加した。発掘調査は、東京大学に所属する鶴見英成氏（助教）のもと実施された。報告者は、同じくカハマルカ州の山岳地帯で行われた発掘調査に計 6 か月間参加した経験を持つが、今後、自身の調査を遂行する予定である海岸地帯では発掘調査の経験がない。両地帯は、土壌の乾燥の度合いなど、環境が大きく異なるため、地層の観察方法や、事故のない安全な調査方法（発掘した箇所崩落を防ぐなど）に相違が存在する。そのため、今後の博士課程の研究計画を実現するためには海岸地帯における発掘調査技術を習得する必要がある。

【実施内容】

A: 踏査の内容と結果

(1) レケ川流域沿岸部

踏査対象は、モロ・デ・エテン遺跡である。この遺跡は、同名の町から 1 kmほどのところに位置する、セロ・モロ・デ・エテンという岩山に所在する。岩山の頂上付近は、標高

170m、現在の海岸線からは、1 kmほどの距離にあたる。この遺跡では、カルロス・エレラを中心に、1979年と1988年に発掘が行われ、墓地群や神殿、テラス、道などの遺構が報告された[Elera 1992, 1994]。

岩山の中心部には、エレラの報告した神殿が位置している。これは、岩山の頂上付近における岩盤などの自然地形を利用した2、3段からなる石造の基壇状建築であり、四方に土留め壁がめぐる。壁に利用される石の大きさは不揃いであるほか、1 m近い大きな石は岩盤を削ったものであり、すべての石が積み上げられたものではない。これらは、岩盤の上に積み上げられた建築であり、堆積が非常に薄い。また、土器や貝などの遺物は周辺に落ちていない。

岩山の周辺、特に東側の裾野には、簡素で小規模な石積み壁と貝殻の集積が多く見られる。これらの建築に伴って、土器が多く分布しているため、漁撈民の居住域であった可能性がある。しかし、散在する土器は形成期よりも後代のものが多く、他の遺構との関係は明瞭ではない。

岩山の西側には、土器および人骨片が多く分布する。墓地であった可能性が高いが、土器は形成期よりも後代のものばかりであり、報告されているような形成期の特徴を持つ破片は発見できなかった。

(2) サーニャ川流域沿岸部

踏査対象はプルレン遺跡である。この遺跡は、最寄りのモクペという村から12 kmほど離れた場所に位置し、遺跡に至る道は農地に囲まれているが、近くに別の村はない。アクセスが悪く、私有地を通り抜けなければ遺跡に至ることはできない。遺跡は、セロ・プルレンと呼ばれる広大な丘陵地帯にあり、海岸線からは約3.5 kmとやや内陸に位置する。こうした丘陵地帯に15基以上の巨大な基壇建築が分布している。測量と小規模な発掘調査を行ったワルテル・アルバによれば、こうした基壇の他に、居住域やゴミ捨て場、道などの遺構があるとされている[Alva 1988]。

基壇状建築の規模は大きく、約50m×80mの方形基壇を最下段に、2段の基壇が積み重なっている。そうした基壇はいくつも存在し、大きさは均一ではないものの、およそその建築特徴（基壇の積み重なり方、階段の位置、広場の配置など）が共通している。また、丘陵地帯のいたるところにある丘の上、あるいは尾根上がテラス状に成型されており、かなり広い範囲が建築空間として複雑に組織されていたようである。基壇やテラスの地表面には、アルバが報告したような形成期の土器片、貝（エクアドルに分布する稀少なウミギクガイもあり）、魚骨（サメの背骨が目立つ）などが分布している。そのほか、形成期よりも後代の土器も存在しているが、基壇から離れた墓地群（盗掘され、人骨が多くある）に付随しているものである。

また、基壇と基壇の間にあるひらけたスペースにおいても、沿岸で採取できる二枚貝や土器が集中して地表面に分布する場所がある。アルバの報告したゴミ捨て場や居住域にあ

たると考えられる。これらの土器は基壇と同じ時期のものであるため、同時期に形成された遺構と想定できる。そうした区域には、アシ科の植物を芯材にして、土で作られた小部屋群が露出している場合がある。これらの遺構は、建築構造や規模の違いから、居住用の施設であった可能性がある

本調査で訪れた他の遺跡と比べても、プルレン遺跡は傑出した規模を誇る遺跡であるが、海岸線からの距離は他の遺跡よりも遠く、立地も異なる。

(3) ヘケテペケ川流域沿岸部

踏査の対象は、プエマペ遺跡、エル・ファロ遺跡、プラヤ・チカ遺跡である。

プエマペ遺跡は、前述のエレーラが過去に発掘調査した遺跡であり、小規模な基壇状の公共建造物、墓地群などが報告されている[Elera 1998]。プエマペ遺跡は、沿岸部に位置する同名の町から南に 500m ほど離れた砂丘に存在する。現在の海岸線から 270m のところにあるが、高い砂丘のくぼ地に位置しているため、海は砂丘に隠れて見えない。エレーラの報告した小規模な基壇は、発掘された半分の部分が地表に露出している。しかし、もう半分は、高い砂丘の一部によって覆われてしまっているため、非常に厚い砂の堆積の下にある。基壇は石造であり、大きな石が垂直に立つようにして並べられている。土器は多く分布しているが、保存状態が悪く、時期を判別することはできない。また、基壇よりも内陸側に 100m ほど入った場所には、激しく盗掘された墓地が広がる。人骨に伴って分布する土器は、形成期よりも後の時期のものが多いようである。概して、砂による堆積が非常に厚く、基壇が位置する深さに達するまでに、多いところでは 5m 近く掘る必要があると予測される。

エル・ファロ遺跡とプラヤ・チカ遺跡は、前述のアルバによって登録されたヘケテペケ川の河口付近の遺跡である。両者には、形成期の土器が分布し、他の遺構が見られないことから、墓地として登録された[Alva 1986]。エル・ファロ遺跡は、ヘケテペケ川の河口からおよそ 8 km 南に離れた遺跡であり、灯台の立つ岬に位置する。パカスマーヨと呼ばれる町から 2 km、海岸線から 200m ほどにある海岸段丘上に存在する。報告者が踏査した結果、数点の形成期と思われる土器を発見することができたが、それらの遺跡は、いずれも近年拡張された町の一部によって破壊されている。そのほかの遺構は見当たらなかった。

プラヤ・チカ遺跡は、ヘケテペケ川の河口から、北に 7.5 km ほど、海岸線からは 200m ほどのところに位置する遺跡である。非常に浅い枯れ谷の河口に位置し、近くに町はないため、アクセスは非常に悪いといえる。踏査の結果、アルバの報告した地図 [Alva 1986] に記された位置に、有機物に起因する黒色土の堆積した遺跡があることがわかった。この遺跡は、少し高まった自然地形の上に、海を臨むようにして立地している。海に沿って細長く形成されていることや、基壇状に成型したような痕跡もないことから、居住活動によって形成されたことがうかがえる。土器は分布しているが、明瞭に形成期と特定できるものは発見できなかった。

(4) チカマ川流域沿岸部

踏査の対象は、クルス・ベルデ遺跡および、ワカ・エル・プルパール遺跡である。両遺跡とも、過去に小規模な発掘調査が行われているが、遺跡の詳細は明らかにされていない[Vasquez 1998]。

クルス・ベルデ遺跡は、チカマ川の河口から北に 6.5 km、マグダレーナ・デ・カオという村から 4 km、海岸線から 180m にある海岸段丘上に位置している。この遺跡は 2 つの低いマウンド状の高まりを有するが、内陸側のマウンドは土器が全く分布していない。道によって切られたことによって、露出した地層をみても土器がないことから、先土器時代の活動によるものと思われる。そこから 50m ほど海側に、もう 1 つのマウンドがある。およそ 4 ha の範囲で緩やかな高まりをもち、その西側に、2m ほどの高さを持つマウンドがのっている。地表面からは形成期の土器が拾えるほか、過去の調査によっても、形成期の土器と丸石を積み上げた小規模な部屋状構造物が部分的に報告されている[Vasquez 氏のご教示による]。盗掘は少ないが、頭蓋骨が存在することから、墓も存在すると思われる。

ワカ・エル・プルパール遺跡は、チカマ川から北に 17.5 km、エル・ミラグロという漁村から南に 1.5 km、海岸線から 300m の海岸段丘上に位置している。遺跡は 10m 近い高さのマウンド状を呈しているが、基壇のように定型的な形は有していない。過去に行われた調査によれば、内部には部屋状の建築が複数埋まっているという。形成期の土器は確認されておらず、遺跡を形成した過去の活動は、先土器時代にその大半が行われたようである。遺跡の地表面には、後の時代の土器が散在している。

(5) チャオ川流域沿岸部

踏査対象はティサル遺跡である。この遺跡は、過去にワパヤが発掘を行い、20m×20m 規模の基壇とその上に作られた部屋状構造物群が報告されているほか、形成期の土器も出土している[Huapaya 1977-78]。遺跡はチャオの町から西に 7 km、海岸線から 4.2 km、チャオ川から北に 3 km ほど離れたところにある、セロ・サンタ・ロサという丘の北側裾野に位置するとされている。踏査の結果、遺跡は農地を開拓するために壊されてしまい、正確な場所を知ることはできなかった。住民の話により、かつて存在したと思われる場所を訪れることはできたが、確証は得られなかった。そのほか、丘の南側で円形の半地下式構造物のようなもの、北側で石積みの風よけのような構造物を確認した。

6) カスマ川流域沿岸部

踏査対象となるのは、LCS-2、LCS-5、モンゴンシーヨ遺跡などである。これらの遺跡については、カスマ河口とラス・アルダス遺跡（カスマ河口から南へ 30 km）の間に広がる沿岸部を踏査した、ガブリエル・プリエトラによって報告されている[Prieto y Freire 2013]。アクセスは非常に難しく、カスマ河口から海岸線の丘陵地帯を長距離車で走らなければな

らない。LCS-2 は、海にせり出した丘陵上にある遺跡で、小さな風よけ、あるいは住居と思われる石造の簡素な建築が数基残されている。報告のとおり、形成期の土器を拾うことができる。LCS-5 は、小さな湾に面した、同じく海にせり出す丘陵の裾野に位置している。自然の丘陵を利用して作られた 2 段のテラスになっており、有機物に起因する黒い土壌が堆積している。石を積み上げた土留め壁や、広場状の空間、円形半地下式の構造物が残っていることから、何らかの公共建造物であった可能性が指摘できる。有機物の堆積は厚く、形成期の土器も散在している。モンゴンシーヨ遺跡は、さらに南へ 6 km ほど行ったところに位置し、海に面した丘陵の裾野に位置している。15m~20m の部屋状構造物が 4~5 基並び、角石と丸石と混ぜて壁が作られている。プリエトによると形成期の土器が採取できるようだが、確認することができなかった。

(7) クレブラス川流域沿岸部

踏査対象となるのは、プラヤ・クレブラス遺跡と、クレブラス川とワルメイ川の間位置する、エリソ遺跡である。プラヤ・クレブラス遺跡は、エドワード・ラニングとフレデリック・エンゲルによって過去に発掘調査が行われた[Engel 1957]。この遺跡は、近郊のクレブラス村から 300m、クレブラス河口から 900m、海岸線から 400m にある、海岸線にせり出した丘陵上および、その裾野に位置している。遺跡の中核は、4 基ほどの黒色マウンドからなっており、その裾野には加工された石が並び、精緻な壁が露出している。このことから、これらのマウンドは基壇状の建築であった可能性が高い。これらのマウンドの正面には、4 基ほどの方形広場も存在する。これらの遺構からは土器が全く検出されないことから、先土器時代の活動に起因するものであると考えられる。また丘陵の北側の裾野からは、同じく加工された石壁による部屋状構造物や、後の時代の土器群が存在する。そのほか、さらに西では、五角形状に並んだ石壁や、長く丘陵を横切るような、精緻で分厚い両面壁などが確認できる。

エリソ遺跡も同じくエンゲルによって報告されており、クレブラス川とワルメイ川の間、トゥキーヨと呼ばれる沿岸の村から 800m ほどの位置にある[Engel 1957]。海岸線から 300m ほどのところに、石製の住居群と墓地群が存在する。住居は 5m~10m 大の円形のものが 10 基ほど確認できる。土器も少量落ちているが、保存状態が悪いため時期を特定することはできない。さらに、100m ほど内陸に進むと、盗掘を受けた墓地群が存在する。土器は明瞭に時期判別できるものがない。全体的に遺物は少ないといえる。

B: 発掘調査

発掘調査の技術を習得するため、東京大学助教の鶴見英成氏のもと、2 か月間の発掘調査に参加した。発掘調査を行った遺跡は、カハマルカ州テンブラデーラに位置するモスキーノ平原遺跡群である。この調査では、報告者が単独でいくつかの発掘区を担当し、作業員 7 人とともに発掘を実施した。調査区の選定から、発掘、出土遺物の登録、層位の解釈、図

面の作成、報告書の作成にいたるまで、一連の過程を経験した。

とくに、その過程において、海岸地帯にある遺跡に特有な調査技術の習得に努めた。例えば、海岸地帯は乾燥した土地であり、堆積も粒子の細かい土壌が多いことから、地層の見分け方が難しい。この調査を通して、そうした粒子の細かい土壌だけでなく、その地層が包含する小礫や石の大きさと包含量の差異に着目して、土層を分類する方法を学んだ。また、この遺跡の基壇内の埋土は、大きな礫を主体としたものであり、土壌が非常に少ないため、発掘中に崩落する可能性がある。今回の発掘では、遺跡と遺物の保存修復の専門家の指導のもと、土を成型した日干しレンガを積み上げることで、崩落の危険がある壁や埋土を支えながら作業を進める方法を習得した。こうした調査技術は、次年度以降に予定している、沿岸部での発掘を円滑に進めるために必要なものである。

また、発掘作業員への給与の支払いや機材の購入など、調査資金の管理の方法を学んだほか、発掘作業員や現地住民、文化省の担当者などと良好な人間関係を築くために必要な、コミュニケーション能力も学ぶことができた。

参考文献

Alva, Walter

1986 *Frühe keramik aus dem Jequetepeque-Tal, Nordperu/ Cerámica temprana en el Valle de Jequetepeque, norte del Perú* (Materialien zur Allgemeinen und Vergleichenden Archäologie 32). München: Verlag C.H. Beck.

1988 Investigaciones en el complejo Formativo con arquitectura monumental Purulén, costa norte del Perú. *Beiträge zur Allgemeinen und Vergleichenden Archäologie* 8: 283-300.

Elera, Carlos

1986 *Investigaciones sobre patrones funerarios en el sitio Formativo del Morro de Eten, valle de Lambayeque, costa norte del Perú* (Memoria de Bachiller). Lima: Pontificia Universidad Católica del Perú.

1992 Arquitectura y otras manifestaciones culturales del sitio Formativo del Morro de Eten: Un enfoque preliminar. In Duccio Bonavia (ed.), *Estudios de Arqueología Peruana*, pp.177-192. Lima: Fomciencias.

1998 The Puémape Site and the Cupisnique Culture: A Case Study on the Origins and the Development of Complex Society in the Central Andes, Perú. Ph.D. Dissertation, University of Calgary.

Engel, Frederic

1957 Early Sites on the Peruvian Coast. *Southwestern Journal of Anthropology* 13 (1): 54-68.

Huapaya, Cirilo

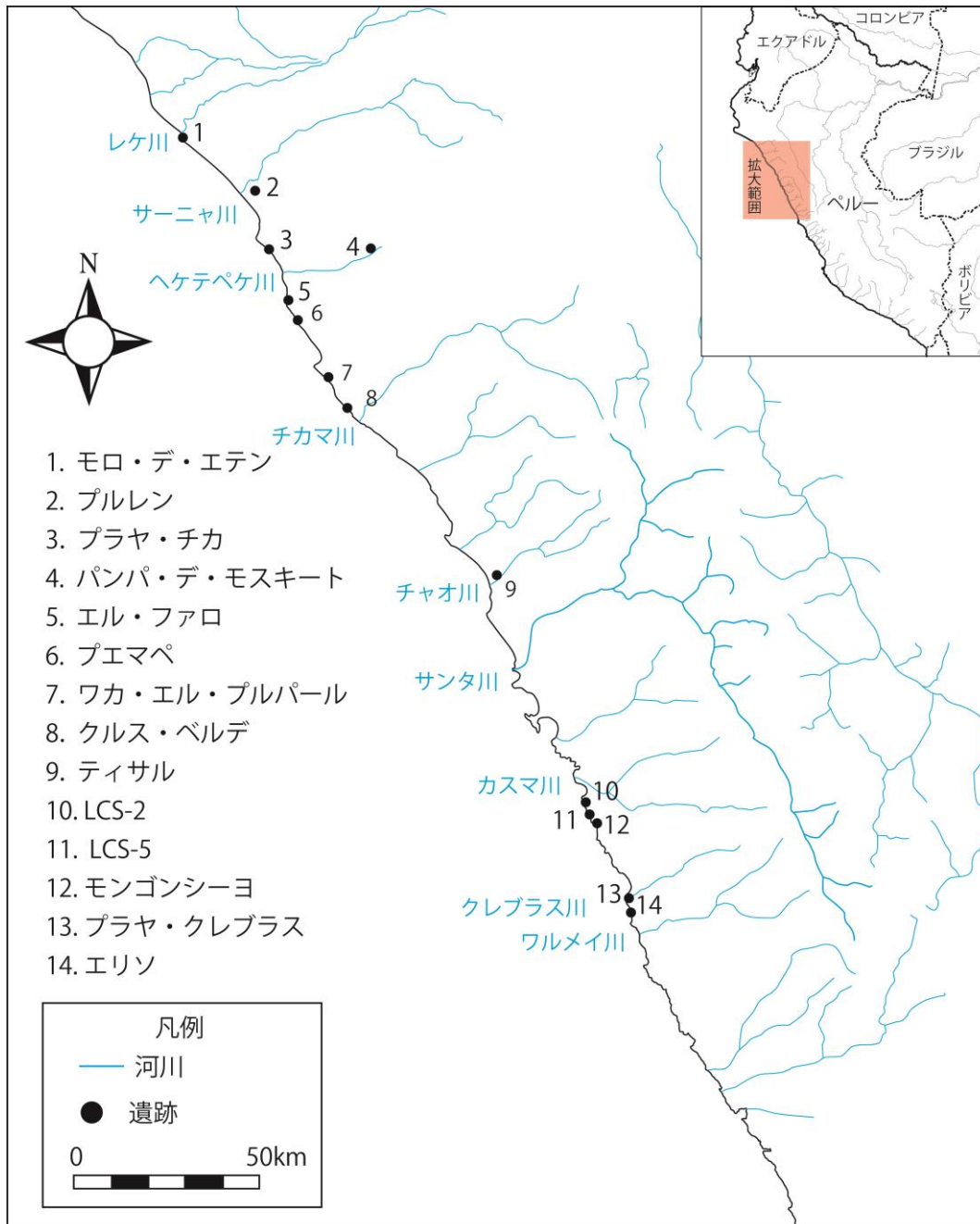
1977-78 El templo de Tizal, valle de Chao. *Boletín del Seminario de Arqueología PUC* 19-20: 127-132.

Prieto, Gabriel and Fernando Freire

2013 Por la ruta del pescado : Asentamientos y caminos prehispánicos de pescadores-mariscadores en el litoral al sur del río Casma, costa norte del Perú. *Arkinka* 213: 100-111

Vásquez, Segundo

1998 Cruz Verde: del Arcaico al Formativo, un ensayo de interpretación. *Revista Arqueológica Sian* 5: 6-8.



●本事業の実施によって得られた成果

本事業の実施により、ペルー北海岸および北部中央海岸沿岸部の諸遺跡の現況を把握し、調査対象の選定に向けて様々な情報を獲得することができた。その結果、チカマ川流域沿岸部のクルス・ベルデ遺跡を博士論文の調査対象遺跡として選定するに至った。クルス・ベルデ遺跡は、遺跡の保存状況が非常に良好なうえ、小さな公共建造物と想定されるマウンドと居住域が併設された、貴重な遺跡である。このクルス・ベルデ遺跡における発掘調査が実現したあかつきには、博士論文作成のための基礎的なデータの収集が十分期待できる。このことから、調査対象遺跡の選定を可能にした本調査の成果は、非常に大きいといえる。

また、北海岸と北部中央海岸という広い範囲を対象として、沿岸部遺跡を踏査した調査はこれまでに前例がない。そうした本調査を通して、北海岸と北部中央海岸では、遺跡立地や建築要素の通時的変化に差異が見られるという新たな知見をえることができた。この成果を、2015年12月に東京大学で行われる、第20回古代アメリカ学会研究大会で発表する。

さらに、2か月間発掘調査に参加することによって、発掘調査を遂行するための技術やコミュニケーション能力、文化省に対する事務手続きのノウハウなどを習得することができた。これらの経験も、今後、クルス・ベルデ遺跡の発掘調査を実現するうえで、欠かせない成果といえる。

●本事業について

博士論文作成のための研究の前段階にあたる本事業は、独創的で具体的、そして堅実な研究計画を立てる上で非常に重要な作業であり、博士課程の研究を建設的に進めていくためには欠かせないものである。しかし、そのような事業は調査資金の獲得が難しく、容易に行うことはできない。このような現状において、学生への支援体制としての学生派遣事業は本学の大きな魅力の一つである。特に、本事業のような渡航費の多くかかるフィールドで調査活動を行うためには、欠かせない制度である。以上のようなことから、今後もこのような事業が継続されることを希望している。